

〔修士論文要旨〕

中世瀬戸内海における村上氏の基礎的考察

* 野 口 敦 史

はじめに

筆者は、大学の卒論において厳島合戦と村上氏との関わりについて論じてきたのである。厳島合戦においては、小早川隆景の家来である乃美宗勝が再三にわたり来島氏や能島氏との交渉のすえ毛利氏側に就いた事を考察してきたが、そもそも村上氏とはどのような集団であったのかという事は詳しくは分からないのである。

村上氏研究の始まりは、河合正治氏による「瀬戸内海史上における厳島合戦」^①により厳島合戦にて毛利氏が陶氏との合戦に当たり村上氏と交渉に当たり、乃美宗勝が来島村上氏・能島村上氏が当たった事を論じ且つ内海商人との関係から考察されているのである。

この合戦には、新資料より来島氏は、来援していないという立場から論じている宇田川武久氏や宇田川氏説を元にして能島村上氏は、来援したと論じている山内讓氏の「海賊衆と厳島合戦」^②、後能島村上氏は、来援したか不明であると論じる。「瀬戸内海海賊―村上武吉の戦い」^③毛利元就の長女と宍戸隆家との間に生まれた娘と河野氏との婚姻から厳島合戦を考察し、その後の毛利氏と河野氏との関係を論じた。

「戦国期の権力と婚姻」^④や同じく来島村上氏から考察している川岡勉氏「中世の地域権力と西国社会」^⑤川岡勉氏・西尾和美氏の共著による。「伊予河野氏と中世瀬戸内世界―戦国時代の西国守護」^⑥等により能島村上氏・来島村上氏の研究は盛んであるが三家の内因島村上氏に関しては、他の二家に比べ厳島以前から毛利氏に従っていたという研究が主でありどのような経緯で毛利に従ったかが論述されていないのが現状である。

又、毛利氏との関わりや来島通康の時代は研究が盛んであり、筆者は愛媛県史の村上文書から村上三家とはどのような集団であったか、どのように陸地の勢力と関わりを持ちどのような存在であったのかを検証し、村上氏と言うものを位置づけていくことがこの修論の目的であり、最大の問題であると考察するのである。主として研究されている能島村上氏を除く因島村上氏と来島村上氏をこの修論で取り扱うのである。

一、警固衆について

村上三家が属する警固衆とは、どのような存在であったのかを既存の文献（愛媛県史 通史）から次の項目からの村上三家についての基本的な活動と働きを明記する。

主な働き

- (一) 海賊城を根城とする。
 - (二) 軍船や兵員を常に配備する。
 - (三) 海上警固や関銭徴収等の決まりが確立する。
- 発生要因

- (一) 鎌倉から海の盗賊に対する勢力として。
- (二) 南北朝期の影響による制海権を巡って対立し、漁業集団の武装化。
- (三) 戦争の変化による奇襲・船による海上武装勢力が向上。

二、因島村上家について

主な文献は、愛媛県史資料編に収蔵されている文書で、元弘三年（一二三三）五月八日付の護良親王令旨、天正十一年（一五八三）一月二十六日付の毛利輝元書状（折紙）までの計四〇通を調査対象にして、次の四項目を表にまとめたのである。

(一) 因島村上氏の総合年表。

(二) 宛所が因島村上氏。（計三四通）

(三) 合戦に関する文書。（計二通）

(四) 所領に関する文書。（計一八通）

三、来島村上家について

主な文献は、愛媛県史資料編に収蔵されている文書で、宝徳三年（一四五二）二月三日付の河野教通書状案、天正十一年（一五八三）五月七日付の黒田孝隆自筆書状（折紙）までの計八六通を調査対象にして、次の四項目を表にまとめたのである。

(一) 来島村上氏の総合年表。（計八六通）

(二) 寺社に関する文書。（計三三通）

(三) 合戦や所領に関する文書。（計五九通）

(四) 差出人が来島村上氏。（計三六通）

来島村上氏が相手に出す文書が因島村上氏より多いのは、来島村上氏の一族である、来島通康が伊予の河野家の重臣クラスとしての地位を持っていたためである。

また川岡勉氏の研究である「高野山上藏院と伊予」から来島村上氏に宛てられた寺社関係の文書から高野山上藏院を取り上げ、来島氏との関係を考察したのである。

終わりに

この修論では第一章にて誓固衆の実態を解明しているのである。第二章では因島村上氏について論じ第三章で論述した伊予と上蔵院との関係では、河野氏による宿坊証文により伊予における河野氏支配地域の領主達は主君と同じく上蔵院との関係を深めていく事になるのである。彼らは上蔵院に対して下向の道中の安全を保障する事により伊予で手に入らぬ品物を注文したりしている事が分かるのである。上蔵院にとつては室町幕府という全国規模の勢力が崩れた事により地方の支配権力と結びつき、師檀関係を築くために各地へと使者として送り込み、また院主自ら下向する等精力的に動いているのである。支配者にとつては国成敗権の存続・強化を図るなど政治利用する等して権力を強化していくのである。また支配者層にとつては京都に滞在する費用を上蔵院から借用して次の年に下向してくる僧に借金を返す等といった文書もあるのである。この上蔵院と領主層間の物品・代金のやり取りをするのに「おんひしり」と言う表現が見える聖が存在しているが、彼らは高野山から下ってくる僧を全員指すのか一定の範囲の僧を指しているのかは不明である。上蔵院文書の研究はまだ新しく引き続き調査をしていく必要があり、上蔵院とは伊予だけでなく各国と高野山とを繋いでいる重要な寺であったと言えるのではないだろうか。

注

- (1) 河合正治「瀬戸内海史上における岐島合戦」(『中世武家社会の研究』吉川弘文館 一九七三年)
 - (2) 山内謙「海賊衆と岐島合戦」(『中世瀬戸内海地域史の研究』法制大学出版局 一九八九年)
 - (3) 山内謙「瀬戸内海海賊―村上武吉の戦い」(講談社 二〇〇五年)
 - (4) 西尾和美「戦国期の権力と婚姻」(清水堂出版株式会社 二〇〇五年)
 - (5) 川岡勉「中世の地域権力と西国社会」(清水堂出版株式会社 二〇〇五年)
 - (6) 川岡勉・西尾和美「伊予河野氏と中世瀬戸内世界―戦国時代の西国守護」(愛媛新聞社 二〇〇四年)
 - (7) 川岡勉「高野山上蔵院と伊予」(『高野山上蔵院文書の研究―中世伊予における高野山参詣と弘法大師信仰に関する基礎的研究』愛媛大学教育学部 二〇〇九年)
- (注) 高野山上蔵院は、現在の高野山小田原谷にあった寺であり金剛三昧院の子院であったが明治二年(一八七七)に高野山で起きた大火により焼失したが、文書は現在、金剛三昧院に現存しているのである。上蔵院は各地の権力者と関係を持ち伊予にも来訪し、河野家と繋がりその家臣であった来島通康とも関係をもったのである。